

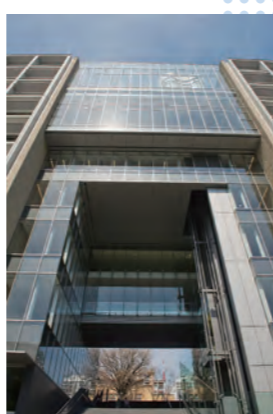
海外留学(大学院 修士・博士課程)に チャレンジしよう! 米国それとも欧州?

日時

2011年10月1日(土) 11:50-19:30 (10:50受付開始)

会場

慶應義塾大学
三田キャンパス
北館1階ホール(セミナー)
南校舎4階ザ・カフェテリア
(懇親会)



主催

財団法人日米医学医療交流財団
慶應義塾大学医学部・医学研究科

共催

社団法人慶應医師会

プログラム

講演

「USMLEについて」

平間 健治 ((株) 栄光 - カプラン メディカルカウンセラー)

特別講演

「アメリカ大学病院の現場」

司会: 佐谷 秀行

中野 伊知郎 (Associate Professor of Neurological Surgery,
College of Medicine, Ohio State University)

講演

「卒前・卒後臨床研修プログラムにチャレンジしてみよう!!」

司会: 伴 信太郎

- ロンドン大学セントジョージ校の臨床実習
外山 弘文 (慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程 2年)
- コロンビア大学実習体験記
羽入田 明子 (慶應義塾大学医学部 6年)
- 米国における内科研修 — 現役チーフレジデントの立場から
島田 悠一 (ニューヨークベス・イスラエル病院 チーフレジデント)
- EU圏における医師免許および専門医取得
— 男女平等の国、スウェーデンにおける一女性医師の経験
宮川 絢子 (カロリンスカ医科大学病院)
- 米国でのレジデンシー、フェローシップの6年間
長浜 正彦 (聖路加国際病院腎臓内科・移植内科)

パネルディスカッション—臨床編

コーディネーター:

佐谷 秀行 (慶應義塾大学医学部先端医科学研究所遺伝子制御研究部門教授)
伴 信太郎 (財団法人日米医学医療交流財団 専務理事 /
名古屋大学大学院医学系研究科総合診療医学教授)

講演

「大学院修士・博士課程プログラムに入ってみよう!!」

司会: 武林 亨

- 欧州の Doctor of Philosophy
安井 正人 (慶應義塾大学医学部薬理学教室教授)
- ジョンスホプキンス大学大学院留学体験談
塗谷 陸生 (慶應義塾大学医学部薬理学教室講師)
- 米国の公衆衛生大学院について
朝倉 敬子 (慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室助教)
- 英国へ行こう!
西脇 祐司 (東邦大学医学部衛生学教室教授)

講演

「ポストドク研究留学をしてみよう!!」

司会: 野村 実

- 日本・ドイツ・アメリカでの生理学研究の日々
挟間 章博 (福島大学医学部細胞統合生理学講座教授)
- イギリス・アメリカ留学を経て — 3つの研究室の違い
平瀬 肇 (独立行政法人理化学研究所・脳科学総合研究センターユニットリーダー)

パネルディスカッション—研究編

コーディネーター:

武林 亨 (慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室教授)
野村 実 (財団法人日米医学医療交流財団 常務理事 / 東京女子医科大学医学部麻酔科学教授)

懇親会

18:00-19:30 三田キャンパス 南校舎4階ザ・カフェテリアにて

セミナー参加費 (定員 200名)

当財団会員および東日本大震災被災者(被災地域から参加される方):

事前申し込み(8月31日まで) ▶ 無料 以降申し込み ▶ 1,000円

学生: 事前申し込み(8月31日まで) ▶ 3,000円 以降申し込み ▶ 4,000円

一般: 事前申し込み(8月31日まで) ▶ 8,000円 以降申し込み ▶ 10,000円

■ 懇親会費(別途): 2,000円

参加申し込み・問合わせ先

財団法人日米医学医療交流財団

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-27-12

TEL: 03 (6801) 9777

E-mail: janamef1988-info@janamef.or.jp

▶ 財団 HP「セミナーのお知らせ」のお申し込みフォームに必要事項を入力の上お申し込みください

(振込み先 りそな銀行 本郷支店 普 1347672 みずほ銀行 四谷支店 普 1819806)

URL <http://www.janamef.or.jp/>

海外留学（大学院 修士・博士課程）に チャレンジしよう！ ー米国それとも欧州？ー

日時：2011年10月1日(土)
11:50ー19:30 (10:50受付開始)
会場：慶應義塾大学 三田キャンパス

プログラム

《講演》“USMLEについて”

11:50ー12:20 平間 健治((株)栄光ーカプラン メディカルカウンセラー)

《開会の辞》

12:30ー12:35 宮坂 勝之(財団法人日米医学医療交流財団 理事長)

12:35ー12:40 末松 誠(慶應義塾大学医学部長)

《特別講演》“アメリカ大学病院の現場”

司会-佐谷 秀行

12:45ー13:25 中野 伊知郎 (Associate Professor of Neurological Surgery, College of Medicine, Ohio State University)

《講演》 卒前・卒後臨床研修プログラムにチャレンジしてみよう！

司会-伴 信太郎

13:30ー13:45 外山 弘文(慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程2年) ロンドン大学にて研修

13:45ー14:00 羽入田 明子(慶應義塾大学医学部6年) コロンビア大学にて研修

14:00ー14:15 島田 悠一(ニューヨーク ベス・イスラエル病院 チーフレジデント) ニューヨーク ベス・イスラエル病院にて研修

14:15ー14:30 宮川 絢子(カロリンスカ医科大学病院) カロリンスカ医科大学病院泌尿器科医師

14:30ー14:45 長浜 正彦(聖路加国際病院腎臓内科・移植内科)

ペンシルバニア病院内科レジデント、バージニア州立大学にて腎臓内科・移植内科フェロー

《パネルディスカッションー臨床編》

14:50ー15:10 コーディネーター： 佐谷 秀行(慶應義塾大学医学研究科遺伝子制御研究部門教授)

伴 信太郎(財団法人日米医学医療交流財団 専務理事/

名古屋大学大学院医学系研究科総合診療医学教授)

《休憩》15:10-15:30

《講演》 大学院修士・博士課程プログラムに入ってみよう！

司会-武林 亨

15:30ー15:45 安井 正人(慶應義塾大学医学部薬理学教室教授)カロリンスカ研究所博士課程

15:45ー16:00 塗谷 睦生(慶應義塾大学医学部薬理学教室講師)ジョンズホプキンス大学博士課程

16:00ー16:15 朝倉 敬子(慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室助教)ハーバード公衆衛生大学院にてMPH取得

16:15ー16:30 西脇 祐司(東邦大学医学部衛生学教室教授)ロンドン大学にてMSc取得

《講演》 ポスドク研究留学をしてみよう！

司会-野村 実

16:35ー16:50 挟間 章博(福島大学医学部細胞統合生理学講座教授)

ゲーテ大学、UCLA、ジョンズホプキンス大学に研究留学

16:50ー17:05 平瀬 肇(独立行政法人理化学研究所・脳科学総合研究センター ユニットリーダー)

ロンドン大学、ラトガース大学、コロンビア大学に研究留学

《パネルディスカッションー研究編》

17:10ー17:30 コーディネーター： 武林 亨(慶應義塾大学医学部公衆衛生学教室教授)

野村 実(財団法人日米医学医療交流財団 常務理事/

東京女子医科大学医学部麻酔科学教授)

《閉会の辞》

17:35ー17:40 武田 純三(慶應義塾大学病院長)

17:40ー17:45 清水 一功(財団法人日米医学医療交流財団 顧問)

《懇親会》

18:00ー19:30 司会 高瀬 義昌(財団法人日米医学医療交流財団 常務理事/医療法人社団至高会 理事長)

閉会の辞 小玉 正智(財団法人日米医学医療交流財団 会長)

海外留学(大学院 修士・博士課程)に チャレンジしよう! ー米国それとも欧州?ー

主催：財団法人日米医学医療交流財団
慶應義塾大学医学部・医学研究科
共催：社団法人慶應医師会

本セミナー開催の趣旨

日本の医学は、臨床医学及び基礎医学研究の面で、格段に進歩してきましたが、世界のトップレベルに到達しているのは、まだ特定の分野に限られています。また、最近の傾向として挙げられるのは、日本の若い世代の留学者人数の減少です。卒前、卒後を含めて一生涯の中で留学する機会は、通常(1)医学部学生時代の短期留学、(2)初期研修終了前後にレジデントとしての臨床留学、(3)大学院卒業(学位取得)前後での研究留学の3つの時期があります。今回のセミナーは、この3つの時期に留学を経験した方から貴重な体験談を得て、

将来、留学を考えている方々に、留学前の準備・留学応募時のノウハウなどをお伝えして、有用な情報を提供できるセミナーとする予定です。多くの方のご参加をお待ちしております。

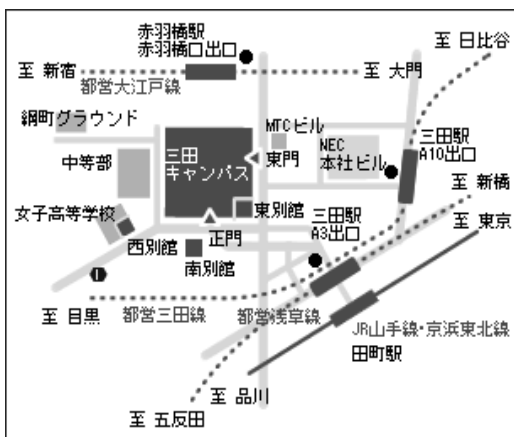
【コーディネーター】

- 安井 正人** (慶應義塾大学医学部薬理学教室教授・医学部国際交流委員会委員長)
- 伴 信太郎** (名古屋大学大学院医学系研究科総合診療医学教授・財団法人日米医学医療交流財団専務理事)
- 小池 薫** (京都大学大学院医学研究科初期診療・救急医学教授・財団法人日米医学医療交流財団専務理事)

会場案内

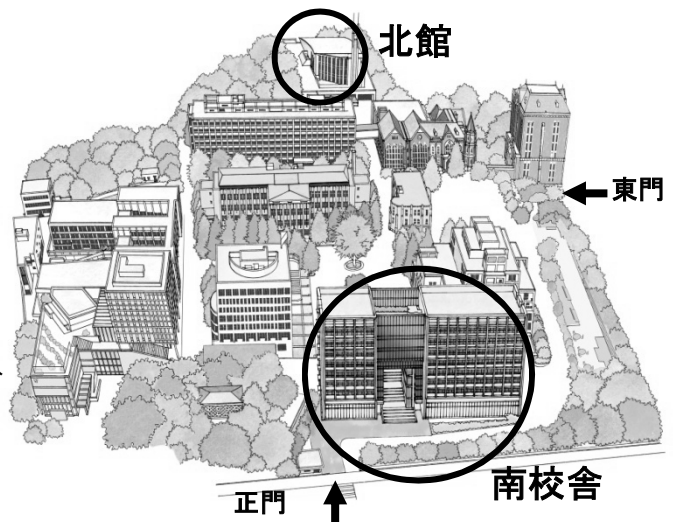
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学 三田キャンパス 北館1階ホール(セミナー) 南校舎4階ザ・カフェテリア(懇親会)



交通機関

- ・JR山手線
- ・JR京浜東北線
- 田町駅下車、徒歩8分
- ・都営地下鉄浅草線
- ・都営地下鉄三田線
- 三田駅下車、徒歩7分
- ・都営地下鉄大江戸線
- 赤羽橋駅下車、徒歩8分
- ※東京～田町:約10分
- ※渋谷～田町:約15分



お申し込み

- (1) 財団HP「セミナーのお知らせ」のお申し込みフォームに必要事項を入力の上お申し込みください。
- (2) 参加費無料の方以外は下記指定金融期間宛にお振込みください。一度お振込みいただいた参加費用はお返しできません。予めご了承ください。
- (3) 申込書および参加費用のご入金(必要な方のみ)を事務局で確認後、参加証を発行いたします。
申し込みから2週間を過ぎても参加証が届かない場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。
- (4) お申込み締切は8月31日(水)とさせていただきます。それ以降のお申込みにつきましては事務局までお問合せください。
また、定員200名に達した時点で締切となります。ご了承ください。
- (5) セミナー当日は、受付にて参加証をご提示いただきますので、忘れずにご持参ください。

参加費用

- ◆当財団会員および東日本大震災被災者(被災地域から参加される方)
事前申し込み(8月31日まで) 無料
以降申し込み 1,000円
- ◆学生
事前申し込み(8月31日まで) 3,000円
以降申し込み 4,000円
- ◆一般
事前申し込み(8月31日まで) 8,000円
以降申し込み 10,000円
- 懇親会 2,000円

参加申し込み・問合せ先

財団法人日米医学医療交流財団

〒113-0033 東京都文京区本郷3-27-12

TEL 03(6801)9777

E-mail janamef1988-info@janamef.or.jp

URL http://www.janamef.or.jp/

振込み先 りそな銀行 本郷支店 普 1347672
みずほ銀行 四谷支店 普 1819806

中野 伊知郎

(Associate Professor of Neurological Surgery, College of Medicine, Ohio State University)

医師のキャリア形成には、臨床診断能力、手術などの手技の鍛錬と経験の積み上げ、医科学研究における業績など、多岐にわたる長年のトレーニングの蓄積が土台となります。若手医師個人が長期的展望をもって、多面的なトレーニングを積むためには、広い視野を獲得することがもとめられます。私は日本で脳外科のトレーニングを修了したのち渡米し、現在は米国大学病院でファカルティとして勤務しています。今回は、現在までのキャリア形成の経緯とともに、米国大学病院の外科系ファカルティの仕事、脳外科レジデント候補者の選別について、そしてその後のレジデンシープログラムの7年間のトレーニング内容を、UCLAとOSUを例に紹介します。

外山 弘文(慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程 2年)

私は 2010 年に医学部を卒業後、大学院の博士課程に進学しました。現在、発生・分化生物学教室にて、造血幹細胞の制御機構について研究を行っております。医学部学生の時には様々な留学プログラムに積極的に参加し、多くの刺激を受けるとともに医療に対する視野を広げることができました。5年生最後の2009年春、医学教育振興財団のイギリス短期留学プログラムにより、ロンドン大学 St. George's の Medical Oncology での1か月間の臨床実習に派遣させていただきました。6年生の2009年夏には、大学のアメリカ留学プログラムを通じて、Johns Hopkins 大学にて1か月の実習をいたしました。この度、このアメリカ留学の経験を念頭に入れながら、ロンドン大学での医学部生との病院実習や実生活の様子をお話したいと思います。ヨーロッパでの病院実習の一例として、ロンドンでの臨床現場の雰囲気や日本との教育方法の違いなど、現地で感じたことをみなさんと共有することで、医学部生の方々が将来の留学について考える際の参考になれば幸いです。

羽入田 明子(慶應義塾大学医学部 6年)

Seeing is Believing!!

初めまして！現在、慶應義塾大学医学部6年に在籍中の羽入田明子です。私は今夏1か月間、NYにあるコロンビア大学の St.Lukes 病院で Internal Medicine Advanced Clerkship というプログラムにて実習して参りました。大学入学以来、漠然といつか海外で勉強してみたいなあと憧れを抱いておりましたが、帰国子女でもない生粋大和撫子？の私にとって米国の一流医学部で臨床実習できる機会に恵まれるとはまさに夢物語のような体験でした。渡米前はポリクリやマッチングの準備に忙殺され、初海外長期滞在という重圧に不安でいっぱいでしたが、学生という比較的時間もゆとりのある間に世界水準の医療を垣間見ることができ、何より同年代の最高峰の医学生達から大いに刺激を受けることができ心より感謝しております。今回は私がどうして米国へ留学してみたいと思ったか、留学するまでの準備、実際に留学してみて気づいた日本と米国の違いについて話したいと思います。一人でも多くの後輩の方々が留学に興味に持っていただけたら幸いです。

島田 悠一(ニューヨークベス・イスラエル病院 チーフレジデント)

大学5年時の Johns Hopkins Hospital での交換留学がきっかけで米国臨床留学を志し、在学中に ECFMG Certificate を取得。2007 年に東京大学を卒業後、国保旭中央病院、東京大学医学部附属病院にて初期研修を行い、2008 年より Beth Israel Medical Center にて内科レジデント。2011 年よりチーフレジデントを務める。2012 年よりハーバード大学附属 Brigham and Women's Hospital にて循環器内科フェローシップ開始予定。現在は臨床・研究・教育に携わる傍ら、米国で研修中の医師の協力を得て情報ポータルサイト・米国臨床留学フォーラム usrinsho.com を運営し、米国臨床留学についての情報提供に努めている。

宮川 絢子(カロリンスカ病院泌尿器科)

1989年慶應義塾大学医学部卒業。日本泌尿器科学会認定専門医・指導医。医学博士。スウェーデン・カロリンスカ研究所およびイギリス・ケンブリッジ大学でポスドクトラルフェロー。2007年4月スウェーデンへ移住。2008年4月、スウェーデンの医師免許取得。2009年1月スウェーデン泌尿器科専門医。カロリンスカ大学病院泌尿器科勤務。日本の臨床および研究の水準は今や、欧米諸国と比べても負けないものになっており、知識や技術の取得のための留学は、昔ほどの意味を持たなくなっている。しかし、それでも外へ出ていくことの意義がある。それは、異なる文化やバックグラウンドを持つ人々と交流を持ち、議論や生存競争で負けない力をつけることだ。日本の若者は昨今、内向的と聞く。移民が30%を超えるスウェーデンで、移民としてのサバイバル競争をしていると、貧しい国からやってきた移民の逞しさには驚かされる。豊かに育った日本の若者はこのままでは太刀打ちできない。実に憂慮すべきことだ。日本の医療現場は、キャリアアップを目指す女性には厳しい。対するスウェーデンは徹底した男女平等の国である。カロリンスカ大学の女性教授の比率は21%。これでもまだ低いと批判されている。男性医師であっても最低数ヶ月の育児休暇を取得する。出産、育児のために女性のキャリアが脅かされるようなことはタブーであり、女性医師を差別するような行為は糾弾される。医師として、女性として、移民として、何故スウェーデンに移住したのか、そして、スウェーデンで医師として自立するようになるまでの知見をお話したいと思う。

長浜 正彦(聖路加国際病院内科)

学歴・職歴

- 1999年3月 日本医科大学卒
(在学中 1年間米国ペンシルベニア大学医学部留学)
- 1999年4月 聖路加国際病院内科 内科レジデント
- 2001年9月 聖路加国際病院内科 内科チーフレジデント
- 2002年4月 聖路加国際病院腎臓内科 腎臓内科フェロー
- 2003年4月 ペンシルベニア大学医学部腎臓内科 リサーチフェロー
- 2004年6月 ペンシルベニアホスピタル内科 内科レジデント
- 2007年7月 バージニア州立大学医学部移植センター 移植フェロー
- 2008年7月 バージニア州立大学医学部腎臓内科 腎臓内科フェロー
- 2010年8月 聖路加国際病院腎臓内科 医幹
- 2011年2月 聖路加国際病院腎臓内科 副医長

資格等

- 1999年3月 日本医師免許取得
- 2002年7月 日本内科学会 認定医
- 2004年1月 米国医師免許取得
- 2007年10月 米国内科学会 専門医
- 2008年7月 米国移植学会 専門医
- 2010年11月 米国腎臓学会 専門医

学会

日本内科学会、日本腎臓学会、日本透析医学会、日本移植学会、日本臨床腎移植学会、米国内科学会、米国腎臓学会、米国移植学会

安井 正人(慶應義塾大学医学部薬理学教室教授)

略歴:

慶應義塾大学医学部教授(薬理学)。医師。医学博士。1989年慶應義塾大学医学部卒業、1989年聖路加国際病院小児科レジデント(1991年チーフレジデント)。1992年、東京大学医科学研究所御子柴研究室客員研究員、東京女子医科大学母子総合医療センター助手。1993年より、スウェーデンへ留学。1997年カロリンスカ研究所大学院(スウェーデン)博士課程終了、Doctor of Philosophy取得。1997年、米国へ移動。ジョンズホプキンス大学医学部ポスドクフェロー、2001年より同小児科・生物化学科助教授。2006年より現職。2000年 Johns Hopkins Young Investigators Day, A. McGehee Harvey Prize、2002年 Spa Foundation International Prize、2004年 S&R Foundation Award。

専門領域:

構造生理学・薬理学。2003年ノーベル化学賞受賞の Agre 教授のもとで、水チャネル、アクアポリンの研究に従事してきた。水分子の動態(ふるまい)から生命現象を捉え直すことをテーマに研究に取り組む。

塗谷 睦生(慶應義塾大学医学部薬理学教室講師)

私は東京大学の理学部を卒業後、神経科学のトレーニングを受けるため、大学院でのアメリカ留学を決めました。1999年、米国ジョンズ・ホプキンス大学の神経科学学科の博士課程に入学し、2004年に神経科学の学位を頂きました。博士課程終了後は米国コロンビア大学で博士研究員として研究を行い、2007年に現所属の慶應義塾大学医学部薬理学教室に異動して現在に至ります。

私が経験したジョンズ・ホプキンス大学の大学院プログラムは、学生を研究者に育てて行くための熱意と工夫に満ちた素晴らしいものでした。2年間に渡る充実した教育、研究室のローテーション、その後のプロGRESS・ミーティングなど、日本の大学院にはないような多くの制度があり、大学院生を育てる充実した環境が整っていました。今回のセミナーでは私が自身の大学院留学を通じて学び、感じた事を中心に、アメリカの大学院プログラムの魅力についてお話致します。

朝倉 敬子(慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室助教)

1996年に医学部を卒業し、卒後10年は大学の医局に所属して内科医(専門は血液内科)をしていましたが、その後公衆衛生の研究室に転籍いたしました。移ってみると知らないことばかりで、それまでに自然に身につけていた臨床医としてのものの見方が社会医学の研究者としてのそれと同じでないことにも気づきました。大学で教育や研究に携わるのであればもっと勉強しないといけないと感じ、30代も後半になっておりましたが、多くの公衆衛生大学院のある米国に2009～10年に約1年間留学いたしました。講演では、米国の公衆衛生大学院でどんな勉強ができるのか、どうやって出願するのか、プログラムを体験してみてどうだったか、生活状況はどうであったかといったこととお話したいと思います。また、留学を経験される方は多くいらっしゃいますが、私は子供と二人で渡米し、勉強と育児を同時に行った点が他の方とは違うところかと思っています。特に若い方にはまだ実感の伴わない内容かもしれませんが、このような選択肢もありえるのだということについてもお話したいと思います。

西脇 祐司(東邦大学医学部衛生学教室教授)

私は、2002年から2年間英国ロンドンに留学しました。特に最初の1年は、ロンドン公衆衛生熱帯医学大学院の疫学修士(MScEpidemiology)のコースに在籍しました。臨床医を経て予防医学の世界に入った私にとって、疫学、公衆衛生をもう一度基礎から系統だって勉強したいと考えたからです。もう10年近く経ってしまいましたので過去が大分美化されていますが、その当時はやはり勉強が大変だったと思います。徹夜こそしませんでした、久しぶりに学生に戻って2時3時まで予習復習です。家族を連れての留学ですので生活・安全の確保のプレッシャーもありました。それでも、今留学を迷っている人に言うでしょう。ぜったい行くべきです、と。少々のリスクを超えて余りあるベネフィットがあるからです。実のところ行き先は、英国でも米国でも良いのかもしれませんが、個人的には英国が大好きです。当日は英国の良いところ悪いところをお話ししましょう。未来先導のための第一歩を踏み出してください。

挟間 章博(福島大学医学部細胞統合生理学講座教授)

私は東西ドイツの統一という激動の時代にドイツに留学していました。私の住んでいた Frankfurt am Main は、金融の中心地でありドイツでは珍しく高層ビルが立ち並び、また工場の煙突が見えるような街でしたが、それでも一歩郊外に出ると、人々の住んでいる住宅地は森に囲まれ、四季折々格段の美しさを見せていました。ゲーテ大学での研究は、上皮膜輸送の大家 Frömter 教授の下で嚢胞性線維症の原因を探るというものでした。そこで私は、「理論的に可能なことは、必ず実現可能である」という教えを受けました。その後、カリフォルニア大学・ロサンゼルス校(UCLA)に研究員として採用されることになり、1991年12月に移動しました。アメリカに到着すると、冬なのにカリフォルニアの空は抜けるように蒼く、長い夜の続くドイツから移動すると、空を見るだけで晴れやかな気分になりました。UCLAでの研究は、E.M.Wright 教授の下で Na 依存性グルコース共輸送体の輸送様式を明らかにするというものでした。UCLA では、「実際に今手の中にある技術を使ってできることを明らかにする」という極めて practical な教えを受けました。ある意味、ドイツとは対極にある姿勢です。その比較を講演で行いたいと思います。

平瀬 肇(独立行政法人理化学研究所・脳科学総合研究センター ユニットリーダー)

【略歴】

- 1993年 ロンドン大学(University College London)
 Computer Science 学部卒業(BSc, First class honours)
- 1997年 ロンドン大学大学院(University College London)
 神経科学研究科博士課程修了(PhD)
- 1996-2004年 ニュージャージー州立大学(ラトガーズ大学)
 分子・行動神経科学研究所(博士研究員・研究准教授)
- 1999-2000年 コロンビア大学生物学部(博士研究員)
- 2004年-現在 理研 BSI ユニットリーダー

私は、イギリスのロンドン大学 University College London 校で学士および博士課程を修了した。その後、博士研究員としてアメリカのニュージャージー州立大学およびコロンビア大学生物学部で研究に従事した。その間に研究分野(興味の対象)は計算機科学から神経科学と大幅に変わり、そのため、3つの研究室で計8年ポスドク生活を送った。当時は目の前にあることしか見えておらず、特に深い考えをもっていた訳ではないが、帰国して暫く経った現在、自分の過去を顧みると其々の研究室で興味深い出会いがあったように思える。今回は、私が経験した3つの研究室を思い出しながら談話したい。